広報人材の育成と教室着席行動に関わる考察

―着席位置と授業中の理解度チェックの成績との相関から―

江間　直美*

要　約

教育機関においてアクティブ・ラーニングが推奨され，講義科目においても授業の工夫が期待されている。アクティブ・ラーニングは，講義形式の授業による成果を踏まえ，さらに大学生の学習意欲を喚起し能力を伸張させることがひとつの目的となっている。

しかし，基礎知識や基本概念の習得なくして，その応用であるアクティブ・ラーニングの成果は期待できないと思われる。また，その講義科目で学んだ内容が，最終的に就職活動を経て，実社会で通用する内容となっているのか否かの評価は難しい。

本研究調査は，広報人材の育成を念頭に，教室着席行動と授業中の理解度チェック（小テスト）の成績との相関をみることで，今後の授業運営の改善を行うヒントを得るために実施した。教室着席行動（座席選択行動）と授業内容の理解度，またその成績との関係，あるいは授業と関連する資格試験の合格者とその座席選択の傾向や成績との関係を調査分析した。

その結果，想定内ではあったものの，教室の前列で教壇や黒板，スクリーンに近い席に座り，なおかつ入り口から遠い奥の座席に座った学生の成績が良いとの結果が得られた。今後，広報人材を育成するための授業を展開する上で，また一般の授業においても，これらの結果を参考にすることで学生の成績を伸張させられる可能性が高い，と思われる。

キーワード：広報人材，教室着席行動，学習意欲，PR プランナー資格取得

1. 研究背景と研究目的

大学における広報人材の育成は，まだ端緒についたばかりと言える。大学における「広報」「パブリックリレーションズ」科目はまだまだ少なく，ここ数年で一気に注目され開講され始めた科目領域である。こうした「広報論」「パブリックリレーションズ」の科目が設置され始めた背景には，一般企業のみならず，行政や非営利団体などにおいて，広報人材が求められ，実務家の育成が急務となってきていることがある。

そのため，パブリックリレーションズの業界団体である公益社団法人日本パブリックリレーションズ協会は，2007 年 9 月，資格試験「PR プランナー検定（PR プランナー資格認定制度／検定試験）」（以下，資格試験，という）を導入した（詳細は【補足資料】を参照）。

その後，大学教育の場においても本格的に積極的な広報人材の育成が始まり，受験指導も行われるようになった。とはいえ，資格試験は，2017 年に丸 10 年を迎える歴史の浅い試験である。認定資格は 3 段階あり，1 次試験合格者に付与される「PR プランナー補」資格，2 次試験合格者は「准 PR プランナー」資格，そして最後の 3 次試験の合格者には「PR プランナー」資格がそれぞれ付与される。

大学教育においては，こうした資格試験を活用

2016 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科准教授　広報，パブリック・リレーションズ，ＣＳＲ（企業社会責任，地球環境問題，社会貢献）

しながら，社会人基礎力の育成，特に広報やパブリックリレーションズを理解した人材を社会に送り出す必要があり，またそのための授業内容の工夫を急ぐ必要がある。

その最初のステップとして，本研究調査は，広報人材の育成を念頭に，教室着席行動（座席選択行動）と授業中の理解度チェック（小テスト）の成績との相関をみることで，今後の授業運営の改善を行うヒントを得るために実施した。教室着席行動（座席選択行動）と授業内容の理解度，またその成績との関係，あるいは授業と関連する資格試験の合格者とその座席選択の傾向や成績との関係をみることを目的に研究調査を実施した。

2. 先行研究

教室着席行動の観点からの研究は多く，また研究成果も多数発表されている。古くは「座席行動の研究（1）一教室内の座席行動と成績一」（1978），「教室における着席行動と学習状況の分析」（1980），「講義室での学生の着席行動と個人特性」（1983），「大学生の座席選択行動と必修・選択科目に対する興味度」（1991），「大学生の教室における着席行動」（2001），「大学生の座席行動と学習態度に関する研究」（2004），「女子大学生の座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性」（2006），「座席による学生の勉学意欲の違いの調査研究」（2008），「教室の座席行動と個人空間一教師への距離の調整としての学生の着席位置一」（2010），「満足度を考慮した着席位置に関するエージェントベースモデル」（2012），「データを援用した学生指導の試み一出席の促進と着席一の誘導に向けて一」（2013），「大学生の授業時における座席選択一学習意欲およびパーソナリティとの関係一」（2015）などがあり，その多くが，教育心理学や発達科学，工学教育等の領域からのアプローチによる研究である。

今回の研究調査では，こうした研究成果を一部参考にしながらも，あくまで教室着席行動と授業内容の理解度との相関や資格取得を目的とする理解度との相関を見る実態調査に限定した。この種の先行事例・研究調査は存在しない。

3. 研究調査概要

3.1. 調査概要

本研究調査の概要は，以下のとおりである。

・科目：江戸川大学「広報論Ⅰ」（前期）
・期間：第一期2015年4月16日～7月30日
　　＊90分授業×15回
　　第二期2016年4月14日～7月21日
　　＊100分授業×14回
・対象：江戸川大学の学生（2年次以上）
　　＊合計192名
・目的：教室着席行動と授業中の理解度チェック（小テスト）の成績との相関を見る

第一期と第二期の授業回数が異なるのは，第二期において制度が変更されたためであり，授業時間の総数は，第一期と第二期は同一である。

3.2. 対象者と座席区分

対象者は，江戸川大学に所属する2年次以上の大学生192名である。「広報論Ⅰ」は，マス・コミュニケーション学科に設置されている科目のため，ほとんどの学生がマス・コミュニケーション学科の所属学生であるが，「広報論Ⅰ」は，他学科履修が可能なため，経営社会学科等，他学科の学生も履修している（今回は，学科別における教室着席行動と授業中の理解度チェック（小テスト）の成績との相関は見ていない）。

対象者の192名は，第一期（2015年）と第二期（2016年）の累計数であり，内訳は，第一期が118名（男子76名，女子42名），第二期が76名（男子33名，女子43名）である。第一期の履修人数が第二期より多い理由は，第一期が旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行年に当たっているためである。また192名は，第一期と第二期において，「広報論Ⅰ」を1回以上出席した学生数の累計であり，毎回，理解度チェック（小テスト）を受けた人数の累計数ではないことにご留意いただきたい。

192名の詳細は以下のとおりである（表1）。

人数のうちカッコ内の数字は，資格試験の受験者または受験予定者である。

表 1　被験者の内訳と合計

学年	2015 年前期		2016 年前期		合計
	性別		性別		
	男性	女性	男性	女性	
2 年生	9	11	15（4）	25（10）	60（14）
3 年生	54（7）	31（8）	17	18（7）	120（22）
4 年生	13	0	1	0	14
合計	76（7）	42（8）	33（4）	43（17）	192（36）

＊（　）内：PR プランナー資格試験の受験者・受験予定者

今回，教室着席行動と授業中の理解度チェック（小テスト）の成績との相関を見る上で使用した教室は，江戸川大学のなかでは大教室に位置付けられる教室で，詰めて着席すれば 400 名程度が収容可能な教室である（図 1）。

そのため，着席制限をせず自由に席を選択させると，多くの学生が後部の後ろの席に集中する可能性があるため，「広報論Ⅰ」の授業では，境界線を設け，後列の後ろの席は着席不可として，可能なかぎりスクリーンに近い席に着席するように指導した。

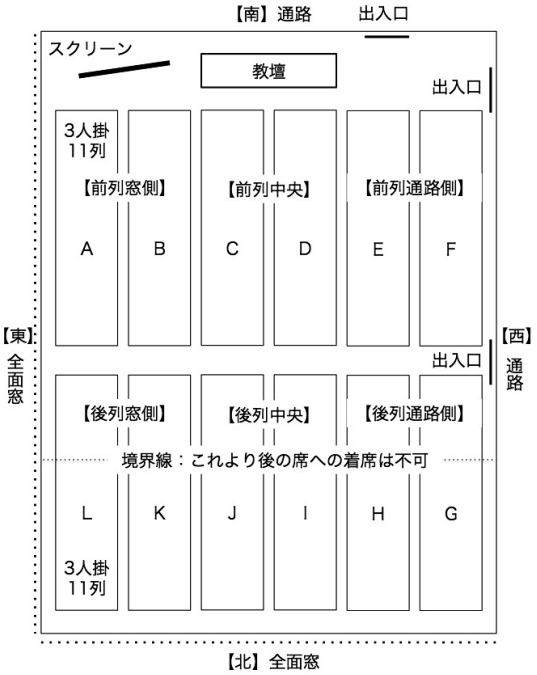

図 1　教室座席区分

今回の研究調査では，教室の前列（A ～ F）と後列（G ～ L）とに大きく 2 つに分け，前列はさらに，前列窓側（A，B），前列中央（C，D），前列通路側（E，F），後列も，後列窓側（K，L），後列中央（I，J），後列通路側（G，H）に 6 区分した。細分化すると，教室は 12 区分（A ～ L）となる。

理解度チェック（小テスト）を実施する際，合計 12 の座席枠に応じたアルファベット記号（A ～ L）を付与した解答用紙を座席ごとに別々に配布し，どの学生がどの座席枠に着席したか，理解度チェックの成績はどうだったか等，が判別可能になるよう配慮した。

座席枠別の人数は以下のとおりである（表 2）。ほとんどの学生は前列（A ～ F）に着席した。なお，数人の学生が席を移動したが，ほとんどの学生が，理解度チェック（小テスト）を実施した初回に着席した座席から，その後移動しなかったため，今回の研究調査においては，学生が着席した座席は固定されたもの，と判断し分析を行っている。

表 2　教室区分別の座席選択人数

（単位：人）	座席	2015 年前期		2016 年前期	
		男性	女性	男性	女性
前列窓側	A	4（1）	10（7）	5（2）	3
	B	8（2）	5（3）	0	14（8）
前列中央	C	6	5（2）	2（1）	6（4）
	D	9（2）	6	3（1）	4（2）
前列通路側	E	7（1）	3	6	5（3）
	F	17（1）	3	5	0
合計		51（8）	32（14）	21（4）	32（18）
後列通路側	G	3	4	1	3
	H	7	1	1	5
後列中央	I	6（1）	0	3	3
	J	6	0	2	0
後列窓側	K	1	4	3	0
	L	2	1	2	0
合計		25（1）	10	12	11

＊（　）内：PR プランナー資格試験の受験者・受験予定者

その結果，学生が着席した座席枠と人数（全体の割合）は，前列 A 枠は 22 名（11.5%），B 枠は 27 名（14.1%），C 枠は 19 名（9.9%），D 枠は 22 名（11.5%），E 枠は 21 名（10.9%），F 枠は 25

名（13.0%），後列のＧ枠は 11 名（5.7%），Ｈ枠は 14 名（7.3%），Ｉ枠は 12 名（6.3%），Ｊ枠は 8 名（4.2%），Ｋ枠は 8 名（4.2%），Ｌ枠は 5 名（2.6%）となった。

学生の着席行動としては，ある特定の座席枠に集中することなく，それぞれの座席枠に平均して着席する傾向となったが，強いて言えば，Ｂ枠とＦ枠が多いといえる。前列Ｂ枠の特徴は，スクリーンが最も見やすくかつ教壇に立ち説明する教員に最も近いことである。一方，同じ前列でも出口に最も近いＦ枠は，スクリーンが見づらく教員との距離もある座席である。その他，前列においてはＡ・Ｃ・Ｄ・Ｅ枠がほぼ同じような人数となった。また後列においては，出口に近いＧ・Ｈ・Ｉ枠に人数が偏る傾向があった。

3.3. 調査内容

本研究調査における調査内容は，教室着席行動と授業内容の理解度チェック（小テスト）の成績との相関を見ることであるが，理解度チェック（小テスト）の内容は下記の通りである（表 3）。

理解度チェック（小テスト）の設問項目は，資格試験を主催する公益社団法人日本パブリックリレーションズ協会発行の公式テキスト [(1)] の内容に可能な限り準拠し，また理解度チェック（小テスト）のためのオリジナル模擬問題を作問した。

「広報論Ｉ」の授業では，達成目標として資格試験に合格できるレベルに到達することを掲げているが，実際には，高度な問題は避け，可能な限り基本的な概念や考え方を問う問題のみを質問した。

第一期（2015 年）における設問数は全 40 問，第二期（2016 年）は全 42 問を設定し，第一期も第二期もほぼ 2 週に 1 回の割合で，復習を兼ねて理解度チェック（小テスト）を実施した。2 回分の授業内容をまとめてチェックする形式を採用し，学生には事前に周知した。

小テストと称してはいるが，あくまで理解度を見るための狙いがあるため，授業の指定教科書とした公式テキストや，その内容を要約した授業配布レジュメ [(2)] 等を見て解答して良い（資料閲覧可），との条件を事前に説明し，当日理解度チェックを受けさせた。

また設問項目は，第一期と第二期が異なるが，オリジナルで作成した模擬問題は，ほぼ同一の問題を使用した。問題用紙は配布せず，スクリーンに写した問題を読み上げながら，解答の時間を与えつつ，ヒントも織り交ぜながら問題を解かせ，次の問題をスクリーンに映し再び同じパターンで行った。毎回の設問数は平均して 6 ～ 7 問程度とし，解答時間を 20 分程度とした。翌週の授業で，前週で実施した理解度チェック（小テスト）の答え合わせを行い理解の促進に努めた。

表 3　理解度チェックの設問内容

	理解度チェックの設問内容	設問数	
		2015 年前期	2016 年前期
Q1	パブリックリレーションズの基本（定義，基本構造，諸概念など）	1	2
Q2	企業経営と広報・PR 活動（歴史，ステークホルダー別の活動，推進体制など）	1	2
Q3	行政，団体等の広報活動（行政広報の歴史，行政広報の特徴，行政広報の事例など）	1	2
Q4	広報・PR マネジメント（PR 戦略の考え方，PR 計画立案，効果測定，諸法規など）	6	3
Q5	コミュニケーションズと PR（コミュニケーション理論・手段，メディア特性など）	3	3
Q6	メディアリレーションズ（パブリシティ，ニュース価値，広報担当者の役割など）	2	6
Q7	マーケティングと PR（定義，基本要素，市場分析，消費者行動，4P 政策など）	6	3
Q8	インベスターリレーションズ（定義，ステークホルダーの種類，ディスクロージャーなど）	3	3
Q9	エンプロイーイレーションズ（社内広報，理念・ビジョン・企業文化，CSR など）	3	3
Q10	広報･PR におけるインターネットの活用（定義，諸概念，パブリシティ，SNS など）	3	3
Q11	国際広報（歴史，基礎知識，留意点，求められる能力，SNS，危機管理など）	3	3
Q12	企業の危機管理（基本概念，管理体制，内部告発，経営トップのリーダーシップなど）	5	6
Q13	経営倫理とプロフェッショナリズム（倫理，コンプライアンス，CSR，原則など）	3	3
	合計	40	42

4. 調査分析結果

第一期（2015 年）全 40 問，第二期（2016 年）全 42 問のそれぞれの座席別正答率は，下記のとおりである（表 4）。

表 4　座席別正答率

（単位：%）	座席	2015 年前期 問題数：40 問 男性	2015 年前期 問題数：40 問 女性	2016 年前期 問題数：42 問 男性	2016 年前期 問題数：42 問 女性
前列窓側	A	58.1	55.8	58.1	46.8
	B	41.6	62.0	−	52.9
前列中央	C	25.0	52.0	64.3	38.9
	D	45.9	57.9	38.1	49.4
前列通路側	E	35.4	49.2	32.9	50.0
	F	26.8	35.0	20.0	−
平均		38.8	52.0	42.7	47.6
後列通路側	G	16.7	11.9	0.0	23.8
	H	22.9	7.5	16.7	21.9
後列中央	I	15.0	−	11.9	13.5
	J	29.6	−	9.5	−
後列窓側	K	12.5	35.6	29.4	−
	L	16.3	45.0	16.7	−
平均		18.8	25.0	19.0	19.7
全体平均		28.82	41.19	27.05	36.45

男女別で正答率を見てみると，第一期（2015 年），第二期（2016 年）ともに女子のスコアが高い。前列後列で見てみると，前列のスコアが高い。年別に見てみると，第一期（2015 年）女子のスコアが高く，第二期（2016 年）男子のスコアが最も低いことがわかる。

座席別（A ～ L）で見てみると，前列窓側の A・B 枠，前列中央の C・D 枠が総じてスコアが高く，一方で後列中央の I・J 枠が低い。ただし，第一期（2015 年）に限っては，後列窓側の K・L 枠でもスコアは極めて低いわけではないことがわかる。

別の見方をすると，前列ではあっても，第一期（2015 年）前列中央 C 枠の男子はスコアが低く，前列通路側の F 枠女子のスコアも低いことがわかる。

学生の着席行動を見てみると，親しい友人と固まって着席する傾向があり，結果的に，授業への取り組みに真剣な学生グループとそうでないグループとに分かれる傾向があり，さらに，友人がいない，またはあえて友人と距離を置いて着席する行動も見られた [(3)]。

次に座席別の設問正答率を見てみると以下となった [(4)]（表 5）。

第一期（2015 年）において，全 40 問の合計正答率が最も高かった座席枠は前列窓側の A 枠（55.1%）で，全問題の半数近くが高い正答率となった。2 番目に高かったのが D 枠（47.5%），

表 5　座席別各設問正答率（2015 年）

（単位：%）	座席	2015 年前期（全 40 問） Q1 1 問	Q2 1 問	Q3 1 問	Q4 6 問	Q5 3 問	Q6 2 問	Q7 6 問	Q8 3 問	Q9 3 問	Q10 3 問	Q11 3 問	Q12 5 問	Q13 3 問	合計
前列窓側	A	35.7	57.1	35.7	51.2	54.8	71.4	50.0	54.8	64.3	38.1	76.2	55.7	71.4	55.1
	B	30.8	53.8	23.1	50.0	41.0	57.7	51.3	38.5	38.5	35.9	51.3	60.0	41.0	44.1
前列中央	C	66.7	54.5	18.2	37.9	36.4	40.9	37.9	27.2	57.6	42.4	30.3	47.3	48.5	42.0
	D	20.0	46.7	46.7	48.9	40.0	56.7	50.0	35.6	48.9	40.0	66.6	60.0	57.8	47.5
前列通路側	E	20.0	30.0	30.0	31.7	46.7	75.0	56.7	16.7	30.0	26.7	46.7	38.0	36.7	37.3
	F	5.0	20.0	10.0	29.2	23.3	27.5	32.5	35.0	38.3	18.3	20.0	33.0	28.3	24.6
前列平均		29.7	43.7	27.3	41.5	40.4	54.9	46.4	34.6	46.3	33.6	48.5	49.0	47.3	41.8
後列通路側	G	28.5	0.0	0.0	11.9	23.8	21.4	11.9	4.8	14.3	19.0	14.3	14.3	4.8	13.0
	H	7.1	12.5	0.0	35.4	29.2	12.5	16.7	14.3	25.0	25.0	25.0	17.5	8.3	17.6
後列中央	I	12.5	33.3	33.3	16.7	5.5	8.3	2.7	0.0	0.0	5.6	38.9	26.7	16.7	15.4
	J	66.7	66.7	16.6	21.7	22.2	25.0	13.9	27.8	22.2	33.3	38.9	33.3	33.3	32.4
後列窓側	K	0.0	60.0	20.0	10.0	26.7	70.0	46.7	13.3	46.7	20.0	33.3	44.0	33.3	32.6
	L	33.3	66.7	33.3	38.9	22.2	33.3	22.2	33.3	33.3	22.2	11.1	26.7	66.6	34.1
後列平均		24.7	39.9	17.2	22.4	21.6	28.4	19.0	15.6	23.6	20.9	26.9	27.1	27.2	24.2
全体平均		27.2	41.8	22.2	32.0	31.0	41.6	32.7	25.1	34.9	27.2	37.7	38.0	37.2	33.0

＊上記座席（A ～ L）のスコアには，当日の理解度チェックの欠席者を含む。

そしてＢ枠（44.1%），Ｃ枠（42.0%）となる。この結果から，第一期（2015 年）においては，前列窓側Ａ・Ｂ枠と前列中央Ｃ・Ｄ枠の座席に着席した学生の成績が良いことがわかる。

ただし，設問によっては，座席枠と正答率との間にばらつきがある。「メディアリレーションズ」（Q6）や「マーケティングとPR」（Q7）の問題では，前列通路側の学生の正答率が最も高いスコアとなっている（75.0%，56.7%）。

さらに「パブリックリレーションズの基本」（Q1）や「企業経営と広報･PR 活動」（Q2）では，後列中央Ｊ枠や後列窓側Ｌ枠の学生の正答率が高い（66.7%，66.7%）。これは，経営学に関心を持つ学生がこの枠に着席していたためと思われること，またそもそも着席選択人数が少ないため平均値が上がったこと，さらには友人同士で答え合わせを行っていた形跡があるため，今回の調査結果としては特例といえる。

次に第二期（2016 年）における座席別の設問正答率を見てみると以下となった（表 6）。

第二期（2016 年）全 42 問の合計正答率が最も高かった座席枠は，第一期（2015 年）同様，前列窓側のＡ枠（52.6%%）で，全問題の半数近くが高い正答率となった。2 番目に高かったのがＢ枠（50.3%），そしてＣ枠（45.2%），Ｄ枠（40.8%）となる。この結果から，第二期（2016 年）においても第一期（2015 年）同様，前列窓側Ａ・Ｂ枠と前列中央Ｃ・Ｄ枠の座席に着席した学生の成績が良いことがわかる。

また第二期（2016 年）においても，第一期（2015 年）同様，設問によっては，座席枠と正答率との間にばらつきが見られた。「パブリックリレーションズの基本」（Q1）や「企業経営と広報・PR 活動」（Q2），「行政，団体等の広報活動」（Q3）では，後列中央Ｈ枠（Q1：83.3%，Q3：50.0%）や後列中央のＩ枠（Q2：58.3%），後列窓側のＫ枠（33.3%）･Ｌ枠（50.0%）の学生の正答率が高い。これは，第一期（2015 年）同様の理由が推測される。

これらデータを見た上で，特に資格試験の受験者および受験予定者に限定して，座席選択人数と正答率を見てみたい。

受験者および受験予定者[5]は，前列窓側Ａ・Ｂ枠と前列中央Ｃ・Ｄ枠の座席にほぼ集中している（表 7）。これは全学生の座席選択のパターンと同じといえる。

受験者および受験予定者の正答率は，以下となった（表 8）。

受験者および受験予定者であるためか，総じて高い正答率となっている。ただし，同じ受験者お

表 6　座席別各設問正答率（2016 年）

（単位：%）	座席	2016 年前期（全 42 問）													合計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	
		2 問	2 問	2 問	3 問	3 問	6 問	3 問	3 問	3 問	3 問	3 問	6 問	3 問	
前列窓側	A	62.5	56.3	50.0	58.3	50.0	33.3	54.2	33.3	75.0	45.8	66.7	72.9	25.0	52.6
	B	46.4	50.0	28.6	50.0	71.4	40.5	50.0	50.0	73.8	54.8	66.7	50.0	21.4	50.3
前列中央	C	37.5	56.3	50.0	33.3	54.2	43.8	41.7	41.7	54.2	45.8	54.2	41.7	33.3	45.2
	D	28.6	42.9	42.9	19.0	23.8	47.6	61.9	38.1	37.5	47.6	66.7	40.8	33.3	40.8
前列通路側	E	22.7	31.8	27.3	36.4	51.5	48.5	54.4	39.4	12.1	36.4	36.4	51.5	24.2	36.4
	F	40.0	40.0	20.0	6.7	13.3	26.7	20.0	20.0	20.0	6.7	33.3	16.7	6.7	20.8
前列平均		39.6	46.2	36.5	34.0	44.0	40.1	47.0	37.1	45.4	39.5	54.0	45.6	24.0	41.0
後列通路側	G	25.0	25.0	0.0	0.0	8.3	8.3	25.0	16.7	33.3	8.3	25.0	29.2	25.0	17.6
	H	83.3	16.7	50.0	11.1	33.3	11.1	0.0	22.2	38.9	22.2	0.0	22.2	0.0	23.9
後列中央	I	16.7	58.3	0.0	0.0	0.0	5.6	11.1	22.2	16.7	5.5	0.0	19.4	0.0	12.0
	J	25.0	0.0	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	16.7	16.7	16.7	0.0	0.0	0.0	13.5
後列窓側	K	50.0	16.7	0.0	0.0	22.2	38.9	33.3	33.3	66.7	22.2	33.3	27.8	33.3	29.1
	L	0.0	0.0	0.0	33.3	33.3	50.0	16.7	16.7	16.7	0.0	33.3	0.0	16.7	16.7
後列平均		33.3	19.5	8.3	15.7	24.5	19.0	14.4	21.3	31.5	12.5	15.3	16.4	12.5	18.8
全体平均		36.5	32.8	22.4	24.8	34.3	29.5	30.7	29.2	38.5	26.0	34.6	31.0	18.2	29.9

＊上記座席（Ａ～Ｌ）のスコアには，当日の理解度チェックの欠席者を含む。

表 7　資格試験受験予定者の座席選択人数

（単位：人）	座席	2015 年前期		2016 年前期	
		男性	女性	男性	女性
前列窓側	A	1	7	2	1
	B	2	3	0	7
前列中央	C	0	2	1	4
	D	2	0	1	2
前列通路側	E	1	0	0	3
	F	1	0	0	0
合計		7	12	4	17
後列通路側	G	0	0	0	0
	H	0	0	0	0
後列中央	I	1	0	0	0
	J	0	0	0	0
後列窓側	K	0	0	0	0
	L	0	0	0	0
合計		1	0	0	0

表 8　資格試験受験予定者の正答率

（単位：%）	座席	2015 年前期		2016 年前期	
		問題数：40 問		問題数：42 問	
		男性	女性	男性	女性
前列窓側	A	62.5	56.4	53.6	54.8
	B	66.3	77.5	−	62.9
前列中央	C	−	76.3	60.7	37.5
	D	50.0	−	31.0	53.6
前列通路側	E	45.0	−	−	52.4
	F	75.0	−	−	−
平均		59.8	70.1	48.4	52.2
後列通路側	G	−	−	−	−
	H	−	−	−	−
後列中央	I	32.5	−	−	−
	J	−	−	−	−
後列窓側	K	−	−	−	−
	L	−	−	−	−
平均		32.5	−	−	−

よび受験予定者でありながら，後列中央のＩ枠の学生の正答率は 32.5% で，受験者および受験予定者の平均値を大きく下回っている。

男女別に正答率をみてみると，192 名の全学生の全体傾向にあるように，女子の成績が良い。しかし，男子でも，第一期（2015 年）前列通路側Ｆ枠（75.0%），第二期（2016 年）前列中央Ｃ枠（60.7%）の学生は，最も高いスコアとなっている。

次に，受験者および受験予定者の座席別の各設問の正答率をみてみると以下となった。

192 名の全学生ならびに受験者および受験予定者の座席選択枠は，全体的にみて，前列窓側Ａ・Ｂ枠と前列中央Ｃ･Ｄ枠の座席に集中し，かつＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ枠に着席した学生の成績が良い傾向があったが，設問別でみると差異がある。

まずは，第一期（2015 年）であるが（表 9），前列通路側Ｅ･Ｆ枠に着席した学生の成績が良い。特にＦ枠については座席選択人数が１名のため，平均正答率を押し上げる要因となっている。

全 40 問の合計正答率をみてみると，第一期（2015 年）においては，前列中央Ｃ枠が最もスコアが高く（72.3%），次いでＢ枠（64.3%），Ｆ枠（61.5），Ａ枠（57.2%）と続く。平均値（59.8%）を上回ったのは，Ｃ・Ｂ・Ｆ枠のみであるが，受験者および受験予定者の総数は，第一期（2015 年）は 20 名であり，理解度チェック（小テスト）の実施日にたまたま欠席した場合，さらに分析対象の母集団が小さくなるため，正答率のスコアに大きく影響してしまうことを差し引いてみなければならない。

ただし，その理由を差し引いたとしても，設問によっては，その正答率が 192 名の全体傾向ならびに受験者および受験予定者の傾向と異なり，前列窓側Ａ・Ｂ枠と前列中央Ｃ・Ｄ枠にのみ座席が集中せず，前列通路側Ｅ・Ｆ枠にも高いスコアを上げる学生がいることがわかる。

次に，第二期（2016 年）における受験者および受験予定者の座席別の各設問の正答率をみてみる（表 10）。

第二期（2016 年）における受験者および受験予定者の数は 21 名で，第一期（2015 年）よりも１名多いが，ほぼ同数としてみて比較できる誤差である。第二期（2016 年）の場合は，後列の座席を選択した学生はゼロであり，すべて前列のみに着席している。

その前列のなかで最も各設問別での正答率が高かった座席枠はＢ枠（61.3%）で，次いでＥ枠（50.0%），Ａ枠（49.1%），Ｄ枠（47.4%），Ｃ枠（46.4%）となる。第二期（2016 年）における受験者および受験予定者 21 名が着席した座席枠で，この前列すべての座席枠の平均値（50.8%）を上回ったのは，Ｂ枠（61.3%）のみであった。

第二期（2016 年）における設問内容は，第一期（2015 年）の設問とほぼ同じことを鑑みると，

全体的に成績が振るわない。また全42問にわたり，全問正解者もいない結果となった。この点についての分析は，後述する「考察とインプリケーション」の章で説明を加えたい。

では最後に，実際に資格試験を受験し合格した学生のスコアをみてみることにしたい（表11）。

第一期（2015年）において資格試験を受験し合格した学生は6名で，座席選択枠は，前列窓側

表9　資格試験受験予定者の座席別各設問正答率（2015年）

（単位：%）	座席	2015年前期（全40問）													合計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	
		1問	1問	1問	6問	3問	2問	6問	3問	3問	3問	3問	5問	3問	
前列窓側	A	50.0	50.0	37.5	33.3	50.0	66.7	50.0	66.7	79.2	45.8	79.2	52.5	83.3	57.2
	B	40.0	80.0	20.0	80.0	53.3	80.0	63.3	53.3	53.3	73.3	93.3	80.0	66.7	64.3
前列中央	C	50.0	100.0	0.0	75.0	66.7	75.0	66.7	50.0	100.0	100.0	83.3	90.0	83.3	72.3
	D	100.0	0.0	100.0	33.3	16.7	50.0	25.0	33.3	50.0	66.7	83.3	90.0	66.7	55.0
前列通路側	E	100.0	0.0	100.0	0.0	66.7	100.0	100.0	33.3	33.3	0.0	0.0	60.0	33.3	48.2
	F	0.0	100.0	0.0	83.3	66.7	50.0	66.7	100.0	100.0	33.3	33.3	100.0	66.7	61.5
前列平均		56.7	55.0	42.9	50.8	53.4	70.3	62.0	56.1	69.3	53.2	62.1	78.8	66.7	59.8
（前列クラス平均）		29.7	43.7	27.3	41.5	40.4	54.9	46.4	34.6	46.3	33.6	48.5	49.0	47.3	41.8
後列通路側	G	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	H	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
後列中央	I	0.0	100.0	0.0	50.0	33.3	50.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	80.0	66.7	30.5
	J	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
後列窓側	K	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	L	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
後列平均		0.0	100.0	0.0	50.0	33.3	50.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	80.0	66.7	30.5
（後列クラス平均）		27.2	41.8	22.2	32.0	31.0	41.6	32.7	25.1	34.9	27.2	37.7	38.0	37.2	33.0

＊上記座席（A ～ L）のスコアには，当日の理解度チェックの欠席者を含む。

表10　資格試験受験予定者の座席別各設問正答率（2016年）

（単位：%）	座席	2016年前期（全42問）													合計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	
		2問	2問	2問	3問	3問	6問	3問	3問	3問	3問	3問	6問	3問	
前列窓側	A	50.0	33.3	33.3	77.7	55.5	44.4	77.7	11.1	66.7	33.3	66.7	88.9	0.0	49.1
	B	50.0	71.4	42.9	61.9	89.5	45.2	76.2	57.1	81.0	57.1	81.0	64.3	19.0	61.3
前列中央	C	40.0	50.0	60.0	20.0	53.3	50.0	53.3	40.0	53.3	53.3	60.0	36.7	33.3	46.4
	D	0.0	66.7	50.0	44.4	44.4	50.0	55.6	44.4	77.8	55.5	55.5	50.0	22.2	47.4
前列通路側	E	33.3	50.0	50.0	33.3	44.4	61.1	66.7	66.7	22.2	55.5	44.4	77.8	44.4	50.0
	F	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
前列平均		34.7	54.3	47.2	47.5	57.4	50.1	65.9	43.9	60.2	50.9	61.5	63.5	23.8	50.8
（前列クラス平均）		39.6	46.2	36.5	34.0	44.0	40.1	47.0	37.1	45.4	39.5	54.0	45.6	24.0	41.0

＊上記座席（A ～ F）のスコアには，当日の理解度チェックの欠席者を含む。

表11　資格試験合格者の座席別各設問正答率（2015年）

（単位：%）	座席	2015年前期（全40問）													合計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	
		1問	1問	1問	6問	3問	2問	6問	3問	3問	3問	3問	5問	3問	
前列窓側	A	100.0	0.0	100.0	0.0	66.7	100.0	83.3	100.0	100.0	33.3	100.0	60.0	100.0	72.6
	A	100.0	100.0	100.0	83.3	0.0	0.0	0.0	66.7	100.0	33.3	100.0	100.0	66.7	65.4
	B	0.0	100.0	100.0	83.3	66.7	100.0	83.3	0.0	0.0	100.0	100.0	100.0	66.7	69.2
前列中央	D	100.0	0.0	100.0	66.7	33.3	100.0	50.0	66.7	100.0	66.7	66.7	80.0	100.0	71.5
	D	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	66.7	100.0	100.0	33.3	43.6
後列中央	I	0.0	100.0	0.0	50.0	33.3	50.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	80.0	66.7	30.5
平均		66.7	50.0	83.3	47.2	33.3	69.5	38.9	38.9	50.0	50.0	77.8	86.7	72.2	58.8

＊上記座席（A ～ I ）のスコアには，当日の理解度チェックの欠席者を含む。

A 枠（2 名）･B 枠（1 名），前列中央 D 枠（2 名），後列中央 I 枠（1 名）である。

合格者のうち，理解度チェック（小テスト）で成績が思わしくなかった前列中央 D 枠 1 名と後列中央 I 枠 1 名は，結果的に，資格試験に合格した。これは，前期開講の「広報論 I」の授業終了後，資格試験の実施日までの約 1 ヶ月間で（【補足資料】を参照），合格に達するための猛勉強をした結果と思われる。努力が報われた形となったようである。

前列中央 D 枠 1 名と後列中央 I 枠 1 名以外の学生は，授業中の説明をしっかり聞き，理解度チェック（小テスト）を通じて復習も行い，日頃の勉強成果が出て，ある意味で，合格は順当な結果だったといえる。

第二期（2016 年）において資格試験を受験し合格した学生は 1 名のみであった（表 12）。座席選択枠は，前列窓側の B 枠で，スクリーンならびに教壇に最も近い座席に着席していた学生である。全 42 問の合計正答率は 69.2％であり，第一期（2015 年）の合格者とほぼ同じスコアとなっている。

第一期（2015 年）の合格者が 6 名で，第二期（2016 年）の合格者が 1 名のみとなった理由は，受験者数の違いによる。第一期（2015 年）の受験者は，2015 年 8 月試験が 15 名，2016 年 3 月受験者が 1 名で，合計 16 名が受験し 6 名が合格した（合格率 37.5％）。第二期（2016 年）の受験者は 4 名で合格者が 1 名（合格率 25.0%）である。

第一期（2015 年）の受験者および合格者が多く，第二期（2016 年）の受験者および合格者が少ない理由は，「広報論 I」の履修者が少ないことに起因するが，もうひとつは，第二期（2016 年）に「広報論 I」を履修した学生が，2016 年 8 月受験を延期し，2017 年 3 月または 2017 年 8 月の試験を予定しているためでもある。

したがって，今回の研究調査は，最終的には，2017 年 8 月受験の結果を見てみないと，本来の分析はできないことをご承知おきいただきたい。

5. 考察とインプリケーション

今回の研究調査は，広報人材の育成を念頭に，教室着席行動（座席選択行動）と授業中の理解度チェック（小テスト）の成績との相関をみることで，今後の授業運営の改善を行うヒントを得るために実施した。

教室着席行動（座席選択行動）と授業内容の理解度，またその成績との関係，あるいは授業と関連する資格試験の合格者とその座席選択の傾向や成績との関係を調査分析したわけであるが，結果的には，教室の前列で教壇や黒板，スクリーンに近い席に座り，なおかつ入り口から遠い奥の座席に座った学生の成績が良い，という想定内の結果となった。

この結果は，講義科目を持つ教員であれば誰しもが経験的に把握できている結果ではあるが，実際にデータを収集し分析したことの意義は大きいと考えている。

大学における授業は，座席自由が多く，語学その他の特別な事情がない限り，一般的には学力別能力別にクラス分けや座席指定を行うことはまずない。特に大教室の場合であれば，ひとり一人の学生の学力をすべて把握した上で座席を指定し授業を実施することは物理的に不可能といえる。

しかし，今回の研究調査から，時には，目的によっては，大教室においても座席指定を試みてみる価値があるのではないか，と思われる結果となった。教室着席行動（座席選択行動）と成績との間には明らかな関係があるためである。

表 12　資格試験合格者の座席別各設問正答率（2016 年）

（単位：％）	座席	2016 年前期（全 42 問）													合計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	
		2 問	2 問	2 問	3 問	3 問	6 問	3 問	3 問	3 問	3 問	3 問	6 問	3 問	
	B	50.0	50.0	50.0	100.0	100.0	33.3	100.0	66.7	100.0	33.3	100.0	83.3	33.3	69.2

＊上記座席（B）のスコアには，当日の理解度チェックの欠席者を含む。

教室の前列で教壇や黒板，スクリーンに近い席に座り，なおかつ入り口から遠い奥の座席に座った学生の成績が良い，との結果からは，当然，第一義的には，以下のような疑問も必ず浮かぶ。

「そもそも学習意欲があり資格試験に合格する学力を身につけるため，という大きなモチベージョンがあるがゆえに，その種の着席行動を取ったに過ぎない」と。

しかし，仮にそれを前提にしたとして，第二義的には，学生が自主的に座席を選択した以上，必修科目ではない選択科目において座席を強制的に移動させる指導をすべきではない，との結論を自動的に導くことはできないといえる。

座席指定を行うか否かは，科目担当教員の采配に任されている以上，まずは小教室で 20 ～ 30 名規模の科目からでも，この座席指定を試みてみる価値はあるのではないだろうか。その上で，物理的なオペレーションを工夫しながら，将来的に大教室においても座席指定を試みてみるというステップになる。

広報人材を育成するための授業を展開する上で，また一般の授業においても，これらの結果を参考にすることで，学生の成績を伸張させられる可能性が高い，と想定される以上，座席指定授業の導入は検討の余地が十分あるのではないかと思われる。

特に，今回の研究調査では，あえて資格試験に合格した学生のみに限定した傾向の把握まで踏み込んで行ったが，資格試験に合格した学生（2016 年 11 月現在，4 年生）のうち，2 次試験にも合格した学生 (6) は全員，就職先として第一志望業界の企業から内定を獲得している。

大学生の「PR プランナー検定（PR プランナー資格認定制度／検定試験）」1 次合格率は，社会人を含めた全合格者の約 11.4% であり（【補足資料】C:資格検定試験業種別 1 次合格率を参照），2 次試験の合格率に及んでは，全合格者の約 3.7% に過ぎない（【補足資料】D：資格検定試験業種別 2 次合格率を参照）。

「PR プランナー検定（PR プランナー資格認定制度／検定試験）」は，そもそも大学生の受験を想定して導入された試験ではない。あくまで実務家（広報・PR に携わる社会人）を対象に，その能力があるか否かを認定する資格試験であり，大学生にとって極めてハードルの高い試験である。ほぼ国家試験なみの超難関検定試験といってもよい (7)。

今回の研究調査を行ったことで，資格試験の合格レベルを目指すための授業を履修し，授業中に実施する理解度チェック（小テスト）で復習を行い，その上で滞りなく受験対策を行うことで，大学生でも 1 次試験のみならず 2 次試験にも合格することが証明された形となった。

6. 今後の課題

今回の研究調査は，教育心理学や発達科学，工学教育等の領域からのアプローチによる研究ではない。しかし，教室着席行動（座席選択行動）と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性等に踏み込んで研究する必要性がある，ということに改めて気付かされた形となった。

その意味で，今後，教室着席行動（座席選択行動）と学習意欲に踏み込んだ研究をぜひ展開しなければならないと考えている。その際の研究テーマは，今回と同様，広報人材の育成を念頭においた大学における教室着席行動と授業内容の理解度，また資格取得を目的とする場合の理解度との相関を見る，という内容にしたいと考えている。

《注》

(1) 日本パブリックリーションズ協会編著『広報・PR 概論 改訂版』（同友館）
(2)「広報論Ⅰ」の授業では，「PR プランナー検定（PR プランナー資格認定制度／検定試験）」公式テキストを教科書指定しているが，受験予定者以外のほとんどの学生が購入していない。
(3) 今回の研究調査では，個々人の個別の着席行動は分析の対象外としている。
(4) 今回の研究調査では，男女別の分析は行っていない。
(5) 受験者および受験予定者の把握は，「広報論 1」の授業初回および最終回にアンケート調査の形で実施した。受験予定者のなかには，3 年生の受験予定者で結果的に受験しなかった学生がいること，また 2 年生の場合は 3 年生になるまで受験を延期した学生がいる。
(6) 2 次試験にも合格した学生の傾向は，1 次試験に合格した学生の傾向と変わらない。

(7) 江戸川大学からは，史上初となる最年少資格取得者（大学1年生の8月に1次試験に合格，2年生の5月に2次試験に合格）を輩出している。

参考文献

(1) 池田央・渋谷和憲「教室における着席行動と学習状況の分析」，日本教育心理学会総会発表論文集，1980
(2) 上藤于城，「大学生の座席選択行動と必修・選択科目に対する興味度」，日本教育情報学会 論文集第7号，1991
(3) 奥埜一奈・菅千索，「大学生の授業時における座席選択一学習意欲およびパーソナリティとの関係一」，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要第25号，2015
(4) 川西千弘，「女子大学生の座席選択行動と学習意欲・態度及びパーソナリティの関連性」，京都光華女子大学研究紀要第44号，2006
(5) 北川歳昭，「座席行動の研究（1）一教室内の座席行動と成績一」，中国短期大学紀要第9号，1978
(6) 北川歳昭，「教室の座席行動と個人空間一教師への距離の調整としての学生の着席位置一」，中国短期大学実験社会心理学研究第38号，2010
(7) 國吉和子，「大学生の座席行動と学習態度に関する研究」，沖縄大学地域研究所年報第18号，2004
(8) 小西孝史，「満足度を考慮した着席位置に関するエージェントベースモデル」，富山短期大学紀要第47巻，2012
(9) 渋谷昌三，「講義室での学生の着席行動と個人特性」，日本教育心理学会総会発表論文集，1983
(10) 下鶴幸宏・中野正博，「座席による学生の勉学意欲の違いの調査研究」，バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌第10号，2008
(11) 濱畠啓子・城仁士，「大学生の教室における着席行動」『神戸大学発達科学部研究紀要第9巻第1号』，2001
(12) 古澤暁，「教室における着席行動の研究（1）」，梅光女学院大学論集，1983
(13) 牧田太郎・小池稔，「データを援用した学生指導の試み一出席の促進と着席一の誘導に向けて一」『平成25年度工学教育研究講演会講演論文集』，公益社団法人日本工学教育協会，2013
(14) 牧田太郎・小池稔，「データを援用した学生指導の試み一着席位置と成績との関係一」『平成26年度工学教育研究講演会講演論文集』，公益社団法人日本工学教育協会，2014

【補足資料】

(1) PRプランナー検定（PRプランナー資格認定制度／検定試験）は，広報・PR業務に従事するために必要な最小限の基礎知識や実務に必要な専門知識を有することを認定する資格で，公益社団法人日本パブリックリレーションズ協会が試験を主催している。

(2) 広報・PR活動は，民間企業のみならず，官庁や行政，地方自治体，NPO・NGOなどの各種団体でも必要性が高まっているため，その業務を担う専門家として認定資格を取得した人材が求められており，受験者の多くは，民間企業の広報・PR部門，広告宣伝部門，マーケティング部門，経営企画部門，調査部門などで業務を担当する社会人や，広告会社や広報・PR会社などで広報・PR関連の経営コンサルティングを担当する社会人などであるが，官庁や行政，地方自治体で広報・PR業務や企画業務などに従事する職員の受験者が増加しており，また大学生の受験者も急増している。

(3) 認定資格は3段階あり，1次試験合格者には「PRプランナー補」，2次試験合格者には「准PRプランナー」，3次試験合格者には「PRプランナー」の資格が付与される（資格取得申請をした場合）。江戸川大学からは，史上初となる最年少資格取得者（大学1年生の8月に1次試験に合格，2年生の5月に2次試験に合格）を輩出するとともに，毎年多数の合格者を輩出している。

(4) 江戸川大学（『科目履修マニュアル』）では，PRプランナー資格の取得をマスコミ学科の学生に推奨しているが，一般企業へ就職を希望する場合には，経営社会学科をはじめ，全学的な推奨資格と言える。

A：PR プランナー資格認定制度／検定試験の概要

	1 次試験	2 次試験	3 次試験
受験資格	とくになし	1 次試験合格者	2 次試験 4 科目合格者かつ 3 年以上の広報・PR 関連実務経験者
試験方法	マークシート方式	マークシート方式	パソコンによる記述方式(Windows: Word，Excel，PowerPoint 使用)
試験内容	広報・PR に関する基本的な知識	広報・PR の実務に関する専門知識	広報・PR に関する実践技能
	・組織体経営と広報・PR 活動に関する知識	科目 A　CSR，IR，危機管理等，企業経営とコミュニケーションに関する知識	課題 A　ニュースリリースの作成
	・コミュニケーションとコミュニケーション手段に関する知識	科目 B　マーケティング，ブランドマネジメントに関する知識	課題 B　広報・PR 計画の立案作成（課題 B は，コーポレート課題もしくはマーケティング課題から選択）
	・マーケティングと広報・PR に関する知識 等	科目 C　広報・PR 実務に関する知識	
		科目 D　時事知識	
試験時間	80 分	各科目 50 分	180 分
出題数	50 問	各科目 25 問	各課題 1 問　計 2 問
合格基準（原則）	正答率 70％以上。全出題数に対して正答率 70％以上で合格。	正答率 65％以上。全出題数に対して正答率 65％以上，かつ各科目の正答率がいずれも 50％以上で合格（全出題数に対して正答率 65％未満の場合，もしくは 1 科目でも正答率 50％未満の場合は不合格）。	正答率 60％以上。評価の配点を，課題 A（ニュースリリースの作成）25 点満点，課題 B（広報・PR 計画の立案作成）50 点満点とし，課題 A･B の総合評価が 45 点以上（60％以上），かつ各課題の評価がいずれも 50％以上で合格。
認定資格（呼称）	PRSJ 認定 PR プランナー補：Assistant Public Relations Planner Accredited by PRSJ	PRSJ 認定 准 PR プランナー：Associate Public Relations Planner Accredited by PRSJ	PRSJ 認定 PR プランナー：Public Relations Planner Accredited by PRSJ

出典：公益社団法人日本パブリック・リレーションズ協会（一部筆者修正）（2016 年 11 月 30 日現在）
＊社会人実務経験のない大学生の場合は，1 次試験と 2 次試験のみ受験が可能。
＊資格試験合格後，資格取得申請を行い書類審査を経た場合にのみ資格が認定される。資格試験合格＝資格取得とはならない。

B：資格検定試験 1 次合格率の推移

試験回	受験者 人	合格者 人	合格率 %
第 01 回（2007 年 09 月 01 日）	752	723.0	96.1
第 02 回（2008 年 03 月 09 日）	397	301.0	75.8
第 03 回（2008 年 08 月 30 日）	379	282.0	74.4
第 04 回（2009 年 03 月 08 日）	421	347.0	82.4
第 05 回（2009 年 08 月 30 日）	441	312.0	70.7
第 06 回（2010 年 03 月 07 日）	371	311	84
第 07 回（2010 年 08 月 29 日）	346	255	74
第 08 回（2011 年 03 月 05 日）	372	293	79
第 09 回（2011 年 08 月 28 日）	371	269	73
第 10 回（2012 年 03 月 04 日）	399	298	75
第 11 回（2012 年 08 月 26 日）	419	310	74.0
第 12 回（2013 年 03 月 03 日）	450	270	60.0
第 13 回（2013 年 08 月 25 日）	470	345	73.4
第 14 回（2014 年 03 月 02 日）	447	295	66.0
第 15 回（2014 年 08 月 24 日）	432	308	71.3
第 16 回（2015 年 03 月 01 日）	422	258	61.1
第 17 回（2015 年 08 月 23 日）	451	376	83.4
第 18 回（2016 年 03 月 06 日）	419	208	49.6
第 19 回（2016 年 08 月 21 日）	516	414	80.2
累計	8,275	6,175	74.6

出典：公益社団法人日本パブリック・リレーションズ協会
（2016 年 11 月 30 日現在）

C：資格検定試験業種別 1 次合格率

（単位：人）		PR 業	一般企業 A	一般企業 B	各種団体	教育機関	自治体	学生	その他	全体
男性	受験者	1,104	1,202	474	64	74	111	571	319	3,919
	合格者	898	1,058	369	49	66	99	309	229	3,077
女性	受験者	938	1,569	430	63	69	68	872	347	4,356
	合格者	712	1,267	323	55	56	53	395	237	3,098
全体	受験者	2,042	2,771	904	127	143	179	1,443	666	8,275
	全体比（%）	24.7	33.5	10.9	1.5	1.7	2.2	17.4	8.0	100.0
	合格者	1,610	2,325	692	104	122	152	704	466	6,175
	全体比（%）	26.1	37.7	11.2	1.7	2.0	2.5	11.4	7.5	100.0
	合格率（%）	78.8	83.9	76.5	81.9	85.3	84.9	48.8	70.0	74.6

出典：公益社団法人日本パブリック・リレーションズ協会（一部筆者修正）（2016 年 11 月 30 日現在）
＊ PR 業には PR 関連業を含む。一般企業 A は，広報 PR 関連職種，一般企業 B は，広報 PR 以外のその他職種。

D：資格検定試験業種別 2 次合格率

（単位：人）		PR 業	一般企業 A	一般企業 B	各種団体	教育機関	自治体	学生	その他	全体
男性	受験者	688	758	223	29	56	58	100	122	2,034
	合格者	538	633	172	23	47	49	56	99	1,617
女性	受験者	499	852	171	41	43	36	113	140	1,895
	合格者	350	611	115	26	36	31	53	95	1,317
全体	受験者	1,187	1,610	394	70	99	94	213	262	3,929
	全体比（%）	30.2	41.0	1.0	1.8	2.5	2.4	5.4	6.7	100.0
	合格者	888	1,244	287	49	83	80	109	194	2,934
	全体比（%）	30.3	42.2	9.8	1.7	2.8	2.7	3.7	6.6	100.0
	合格率（%）	74.8	77.3	72.8	70.0	83.8	85.1	51.2	74.0	74.7

出典：公益社団法人日本パブリック・リレーションズ協会（一部筆者修正）（2016 年 11 月 30 日現在）
＊ PR 業には PR 関連業を含む。一般企業 A は，広報 PR 関連職種，一般企業 B は，広報 PR 以外のその他職種。